

臨床活動報告 — 4 —

「がん患者さんとそのご家族のためのウエルネスセッション」 設置に関する研究会活動

—看護実践開発センター、外来化学療法部活動の進展—

齋藤 ゆみ^{*1}, 稲本 俊^{*1}, 我部山キヨ子^{*1}, 若村 智子^{*1}
黒木 裕士^{*1}, 横出 正之^{*2}, 宇都宮宏子^{*3}, 龍野 和恵^{*3}
平田 明美^{*3}, 光森 道英^{*2}, 尾崎 幹子^{*3}, 中村 隆之^{*4}
多田 春江^{*5}

はじめに

2004年の健康科学に「看護実践開発センター」の設立の経緯と外来化学療法部での臨床活動について報告した。実は「看護実践開発センター」は文部科学省の指導により、看護職以外の医師や他の医療職も含めたより包括的な教育・研修のセンターの枠組みの中で検討することが要請され、京都大学病院では17年度に「総合臨床教育・研修センター」をたちあげ、「看護実践開発センター」の機能はその中に統合されることになった。「看護実践開発センター」の設置は看護職の発展にとっては画期的な第一歩であり、いったんは京大病院の一センターとして認知されながら1年でその役を閉じるることになったことは誠にもって残念といわざるを得ない。しかし、この実践開発センターのプロジェクトの一つであった外来化学療法部での共同研究活動をきっかけとして「がん患者さんとその御家族のためのウエルネスセッション」の設立に関する研究会が誕生し、着実な活動が展開されてきている。

今回は実践開発センターの一プロジェクトから発展した「がん患者さんとそのご家族のためのウエルネスセッション」研究会設立の経緯と活動組織、活動内容、活動の展望などについて報告するとともに本ウエ

ルネスセッションが多くの方々の理解を得、近い将来京大病院に設置されることを期待して筆を執った。

1. 「がん患者さんとそのご家族のためのウエルネスセッション」設置のための研究会設立までの経緯

看護実践開発センターの平成16年度プロジェクトとして京大病院外来部門に「がん患者・家族のウエルネスセッション（後に改名）」の設置を提案した。そのきっかけとなったのは化学療法部で出会った3人の患者さんとの交流からである。心の不安を聞いてもらえる相手がいない患者さん。10年以上もがんに侵されながら「生きる楽しみ」を追求し、この楽しみを他の患者さんへも伝えたいと思っている患者さん。ご自身が闘病しながら痴呆の奥様の面倒を見られていた患者さん。これらの方々のお話から病の一人一人の体験そのものが他の闘病者の貴重な経験になること、そして不安や寂しさ、誰かに聞いてもらいたいという欲求や日常生活の些細な出来事から発するストレスに対して病院はもっと支援の手を差し伸べる必要があるとの信念からである。

まず、京大病院の外来で実態の聞きとり調査を行った。その結果、入院期間の短縮や日帰り手術、外来でのがん治療などの先進医療に伴って、地域ネットワーク医療では入院前後の不安への相談件数の増加や、デイサージャリーでの術後患者の自宅での疼痛管理への不安、病棟や化学療法部での心のケアやコンサルテーションへの要望など、現実には病院のサポート体制から早期に孤立し不安を抱えたまま退院する患者さんや外来患者さん、そのような患者を支える家族などのケアへの要望が増加していることがわかった。

そこで、特に外来部門に通院する癌・慢性疾患患者のウエルネスの向上を目して患者やその家族が納得の行く医療と主体的な生活を享受できるための支援体制と支援拠点を創設することを目的として医学部保健学科教員および外来4領域（癌化学療法部、デイサー

*1 京都大学医学部保健学科
〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53
School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kyoto University

*2 京都大学医学部附属病院地域ネットワーク医療部
Department of Clinical Innovative Medicine, Translational Research Center, Kyoto University Hospital

*3 京都大学医学部附属病院看護部
Division of Nursing, Kyoto University Hospital

*4 京都大学医学部附属病院探索医療開発部
Department of Experimental Therapeutics Translation Research Center, Kyoto University Hospital

*5 京都大学医学部附属病院探索医療検証部非常勤職員
Division of Clinical trial Design and Management, Translational Research Center, Kyoto University Hospital

受稿日 2005年9月9日

設置理念

病を「身体と心」の統合概念で捉え、「がん」の高度先進医療を補完する全人的ケアを実践すべく、京大病院外来に通院するがん患者およびその家族の QOL の向上と主体的な医療参加を支援、促進すること。

運営組織

「がん患者と家族のためのウエルネスセッション」運営組織

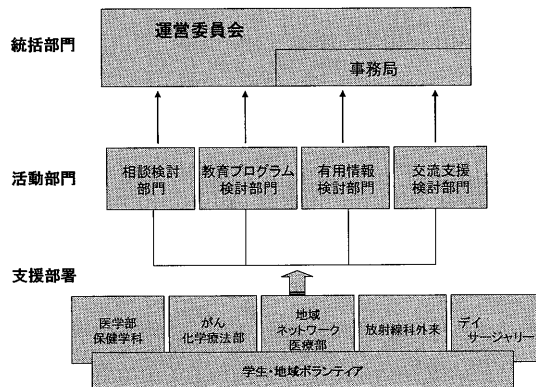


図1 がん患者さんと家族のためのウエルネスセッション

ジャリー、放射線科、地域ネットワーク医療部)の看護師長および医師の有志が集まってウエルネスセッションのイメージづくりを開始した。

以下に主だった活動内容を経時的に示す。

平成16年5月 「がん・難治性疾患患者の外来部門における全人的ケアモデルの研究」厚生労働省科学研究費助成申請

平成16年6月 医学部保健学科教員および外来4領域（癌化学療法部、デイサージャリー、放射線科、地域ネットワーク医療部）の看護師長および医師有志による活動支援者の会合。

平成16年11月 活動支援組織を構成し、会合を定期化。ウエルネスセッションの設立に向けての活動開始。

平成16年12月 内山副病院長へウエルネスセッション構想の説明（嶋森、齋藤）

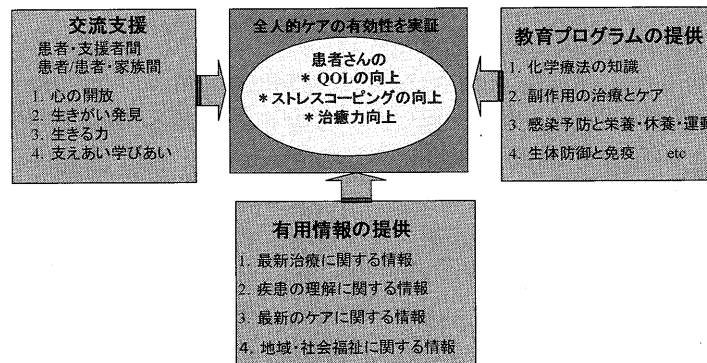


図2 がん患者さんと家族のためのウエルネスセッションの目的と機能

表1 「がん患者さんとそのご家族のためのウエルネスセッション」会議の開催経過

回	日時2005場所	検 討 事 項, 決 定 事 項	特 記 事 項
1	2月1日18時 病院5F研修室	1. 本会議メンバー：各領域（保健学科、外来化学療法部、放射線部、デイサージャリー、地域ネットワーク医療部）の世話人 2. ウエルネスセッションの対象者と名称の決定 3. 運営組織の検討、役割分担の検討 4. 患者のニーズ調査の実施を検討	敬称略：平田、光森、龍野、宇都宮、中村、藤田、尾崎、多田、我部山、黒木、稲本、若村、齋藤
2	3月8日18時 5FB会議室	1. 設置理念の決定 2. 運営組織の決定 3. 運営委員会組織の規定の決定	
3	4月12日18時 病院8F	1. アンケート調査について 2. 活動部門の具体的活動計画について 3. 活動支援の学生ボランティアの募集と状況報告	学生ボランティアグループの組織を結成 第1回会議（5/24）
4	6月14日18時 別館309	1. 病院玄関に「ウエルネスセッション」設置の提案 2. 活動支援に関して外来化学療法部 福島先生と面談 3. 患者さんの活動支援者に向けて「患者さんへのお手紙」検討	保健学科別館309号室に研究室確保 学生ボランティア名簿登録者（保健学科学生20名）
5	7月19日18時 別館309	1. 「患者さんへのお手紙」京大病院倫理委員会への申請を検討 2. 「教育プログラム検討部門」「有用情報提供部門」の本年度活動として12月にクリスマスイベントを計画。本活動のアピールの場とすることを決定。学生ボランティアグループとの共同	
6	8月9日18時 別館309	1. 「患者さんへのお手紙」京大病院倫理委員会への申請書提出 2. 12月クリスマス企画の具体化検討	ブログにホームページ開設

平成17年1月 「がん・難治性疾患患者のウエルネスセッションの新設—高度医療の全人的ケアを補完する新たな外来機能」

18年度概算要求として特別教育研究経費要求申請（齋藤）

平成17年2月 正式な研究会組織としての第一回会議開催

月1回の定期会議によって活動組織や研究会の規定を決定し設立に向けて具体的活動を開始。

2. 「がん患者さんとそのご家族のためのウエルネスセッション」研究会の設立およびその組織と活動の概要

上記で示したような経緯を踏まえ、第1回のウエルネスセッション会議を平成17年2月1日に開催し、この会議によって、正式名称を「がん患者さんとそのご家族のためのウエルネスセッション」とし、その設立のための研究会を発足させた。

これまでの会議の開催と討議内容に関して表1にまとめた。

また、これまでの会議で決定された研究会の理念や

運営委員会組織、支援体制を図1、図2によって示した。

現在「がん」は言うまでもなく我が国における死因の第1位を占めている。しかし、その征圧に向けた近年の医学・医療の進歩によって、生存率の向上と長期生存は以前よりまして格段に改善している。同時にこのような状況を背景にして、がん患者やその家族の不安やストレスに対処してQOLの向上を図ることの重要性は経験的にも、精神免疫学研究の結果によっても明らかとなっている。

このような中、平成17年5月28日大阪NHKホールにおいて日本で初めての「がん患者全国大会」が開催された。そこでの一番の訴えは「日本のがん患者は情報難民である。最新の情報がどこに住んでいようと患者の誰にも与えられるように」というものであった。病院に患者さんへの情報や交流のセンターを設置することは当然のことと考えられる時代になりつつあるのである。京大病院における「がん患者さんとそのご家族のためのウエルネスセッション」設置がその魁となることを願って今後とも本研究会の活動を推進していくつもりである。